

「そこひ」は昔から失明する病気と恐れられていました。見えない理由を探す上で、昔のヒトは目の瞳孔の色に注目し、注意深く観察しました。瞳孔（隙間）の中が白く見えるものを **しろそこひ白内障**、眼圧が高いために角膜に浮腫（水が貯まる状態）が起こり、当てた光が散乱し、瞳孔が緑色（あお）に見える病気を **あおそこひ緑内障** と呼びました。また、瞳孔の色は黒色で正常と変わらないのですが、視力が低下する病気を **くろそこひ黒内障（視神経萎縮）** といいました。そのなかで現在失明することがなくなったのが **白内障** です。

白内障とは

眼球の中にあるレンズ（水晶体）はその構造が規則正しくなっているために光の乱反射が起きにくく透明性が常に維持されています。しかし、何らかの原因で、構造が不規則となり、**水晶体が白く濁る病気**が白内障です。皆さんが良く知っているのが **加齢白内障** でしょう。白内障が老化現象のひとつであるとよく言われますが、それは正確には正しくありません。水晶体の老化では、水晶体内の水分が減少し、水晶体が硬くなるのみで、混濁することはないのです。90歳を過ぎても、水晶体の中心の核が硬くなり黄色くなるだけで、視力も低下しない方も多くいらっしゃいます。何らかの要因が加わり、**水晶体の水分が増加し、はじめて白内障が起こります**。加齢白内障のほかには、糖尿病、ステロイド投与、放射線、紫外線、眼疾患の合併症などによって起こる白内障があります。最近、紫外線が白内障をおこすので紫外線遮断のメガネをかけたほうがよいと喧伝されています。280nm以下の紫外線は100%角膜に吸収され、300nm以上のほとんどの紫外線は角膜・水晶体に吸収され、網膜に達するのは1-2%です。紫外線が多い雪山や南の島にいくと、痛みとともに涙が多く出て視力が落ちる角膜炎（雪目）が起きます。これは紫外線の角膜に対する障害によって起こるのです。確かに、動物実験では、紫外線をマウスの水晶体に当て紫外線白内障を作ることにも可能です。また、ネパールなど高地に住んでいる人に白内障が多いといわれていますが、日本ではどうでしょうか。あまり過度に心配する必要はないでしょう。なお、色つきサングラスのうち紫外線がカットされていないものは掛けない方がよいでしょう。

白内障の症状は、おもに視力低下です。初期には少し見えにくくなったり、明るいところや夜間の対向車の光が眩しいと感じる方や、疲れ眼（眼精疲労）を訴える方もいらっしゃいます。進行すると視力が低下し霧の中にいるように見えます。

白内障の治療には、お薬と手術する方法があります。初期の白内障には薬物を投与することが多いのです。注意深く観察していますと、混濁になる前の水隙といわれる部分が消失することはよく経験します。水晶体には元来、自浄作用という混濁を軽減する水晶体自身の作用がありますので、実際お薬が白内障を軽減したかどうかを証明するのは実際にはなかなか難しいことです。現在、厚生労働省が白内障薬として認可している点眼薬や内服薬が数種あり、初期の白内障に利用されています。院長も副院長も若い頃に白内障の研究をし、**C R G (Co-operative cataract research group meeting 日米合同白内障学会)**の国際学会で、それぞれが著名な白内障研究者の前で発表したことをなつかしく思い出します。現在においても、全世界で多くの白内障の研究をなされていますが、いまだ白内障を確実に治す薬物はないようです。

一方、進行した白内障には手術療法しかありません。手術の適応時期は白内障が進行して日常生活に不自由に感じたときです。視力が1.0であっても明るいとこで見にくければ手術を行いますし、ごく軽度の視力低下でも職業上不都合であれば手術をします。その方々の不自由さが手術時期を決定することになります。手術では、超音波を利用した器具で混濁した水晶体を取り除き、人工の水晶体（眼内レンズ）を眼内に挿入します。昔の手術に比べて、傷口も小さく安全な手術ですので安心して手術を受けることができます。

白内障手術

当院では、ご紹介を希望なされる患者さんは希望する診療機関にご紹介いたしますが、**院長・副院長が術者となり、東急病院（大岡山）神谷橋眼科（北区）各病院にて手術を施行しています。**術前1回と手術日のみ前記の病院に通院していただき、術前・術後は当院で診察治療を行います。白内障手術は日帰り手術が主になりましたが、入院を希望される方は、ご相談下さい。手術は点眼麻酔による「痛くない手術」を行っていますので、安心してお受けください。